

書評

## 「移動する子ども」の名付けと名乗りの弁証法的営為

小林聡子 (2021). 『国際移動の教育言語人類学——トランスナショナルな在米「日本人」高校生のアイデンティティ』明石書店.

小幡 佳菜絵\* 小澤 伊久美†

© 2024. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

### 1. 本書と「移動する子ども」学の接点

本稿は、小林 (2021a) を「移動する子ども」学の文脈に位置づけたうえで、本書の研究意義を検討することを目的とした書評である。「移動する子ども」学とは、「移動」と「ことば」というバイフォーカル (bifocal) な視点から、移動性、複文化性、複言語性を持つ人のあり方を考察する」新しい学問領域であり (川上, 2021, p. 6), 「移動する子ども」とは「幼少期から複数言語環境で成長したという経験と記憶」を中心に構成される, 分析概念のことを指す (p. 5)。

小林 (2021a) は、米国ロサンゼルスに位置する公立現地校 (仮名: パール高校) をフィールドに、エスノグラフィ (2005~2007年) と13年にわたる追跡調査を中心に、「日本人」高校生たちの可変的な「アイデンティティの位置取り」(p. 16) を多様な研究方法を活用しながら多角的に描く、「教育言語人類学の試論」(p. 7) である。ここでは、「日本人」というカテゴリーは所与のものではなく、高校生自らの名乗りや、教員や同級生といった他者からの名付けによって、相互行為のなかで動的に生成される社会的構築物として捉えられている。また、このような「日本人」というカテゴリーは、「ジャブ」「FOB (Fresh-Off-the-Boat)」「アメリカナイズ」

\* 清華大学大学院人文学院博士後期課程 (Eメール: [xfjch19@mails.tsinghua.edu.cn](mailto:xfjch19@mails.tsinghua.edu.cn))

† 国際基督教大学

などの多様なラベルの使用や、校内の特定の場所を反復的に占拠するなどの空間的実践を伴いながら、日常の相互行為のなかで、さらに細分化されうるものでもある。

本稿では、小林(2021a)が描出する「日本人」高校生たちの経験と記憶の総体を、主に日米間をトランスナショナルに生きる「移動する子ども」と解釈した。そのうえで、かれらの日常の相互行為におけるアイデンティティの位置取りを、「名付けと名乗りの弁証法」的営為(川上, 2021, pp. 69-88)としてさらに関連づけることで、小林(2021a)の「移動する子ども」学への研究意義の検討を具体像とともに試みる。

この目的のもと、本稿を次のとおり構成する。まず、2節では、「移動する子ども」の2軸である「日常的移動」と「個人史的移動」を基点に、小林(2021a)の要点を整理する。さらに、3節では、名付けと名乗りの弁証法的営為の観点から、本書の研究意義を具体的に検討するため、川上(2021)の提起する「動態性」「政治性」「社会性」という名乗りの3側面を手がかりに、本書の考察を進めていく。

## 2. 本書の要点

### 2. 1. 「日常的移動」と「個人史的移動」

本稿2章は、「移動する子ども」学との接点を明確にしたうえで本書の要点を呈示するため、次の3節に分けて構成する。まず、本書に通底する理論的・方法論的枠組みを、本書序章を参照しつつ確認する(2. 2節)。そのうえで、後続の2節では、「移動する子ども」における、「日常的移動」と「個人史的移動」(川上, 2021, p. 6)という2軸に基づき、要点の整理を試みる(2. 3節, 2. 4節)。「移動する子ども」には、「空間」「言語間」「言語教育カテゴリー間」という、複数言語環境で成長する子どもたちの「移動経験の貯蔵庫」と、「今、ここ」という共時性を示す「日常的移動」の横軸、「あの時そしてこれから」という過去と未来を繋ぐ通時的眼差しを示す「個人史的移動」の縦軸がある(川上, 2021, p. 5)。しかし、「あの時、あの場所」を語るライフストーリーにおいても、語り手の経験や記憶は、語り手と聞き手の「今、ここ」における相互行為によって紡がれ、多層的・多声的、かつ可変的で揺らぎをもって示されていることを本書は明らかにしている。この点に留意しつつ、以下の節で本書の要点を呈示していきたい。

## 2. 2. 理論的・方法論的枠組み（序章）

序章では、日常の相互行為における、国際移動する子どもたちの可変的なアイデンティティを多角的に理解するための、理論的・方法論的枠組みが呈示されている。具体的には、理論的枠組みとして、「translocality」「transvocality」という両概念が導入されている。「translocality」は、個人の経験的意味づけによる、物理的側面だけに限定されない多義的で可変的な場所性を示す「多場性(multilocality)」(Rodman, 1992)に、「移動」という状況性を組み込んだものである(Greiner & Sakdapolrak, 2013)。本書では、この「translocality」を「transvocality」とともに導入・援用することによって、多様な空間・時間・社会が絡み合う、移動する主体の多層的で多声的な相互行為のありようを捉えることが、目指されている(小林, 2021a, p. 16)。一方、「transvocality」は、「ポリフォニー」(Bakhtin, 1981, 1984)に系譜をもつ「多声性(multivocality)」概念が、さらに展開されたものである。従来、「多声性」は、対話のはらむ、個人内の複数の意識(声)を意味している。本書では、「時間と空間の流動性を分析軸に据える」ことを含意する、trans-を加味した概念として捉えなおしをはかることで、移動する主体の多声的な相互行為に現れる、より「不加算的で流動的」かつ可変的な「声」を理解することが目指されている(小林, 2021a, p. 16)。

このように、日常の相互行為に根ざした、移動する主体の多層的・多声的で可変的なアイデンティティのありようを理解するため、方法論的枠組みにおいても、多角的な視点からの検討が本書では目指されている。具体的には、他者を客観的に記述する枠組み自体への反省的眼差しに留意しつつ(Clifford, 1986)、エスノグラフィにおける非構造化インタビューや、高校を中心とした生徒たちの場所認識を可視化したメンタルマップなどによって、データを収集したうえで、談話分析や会話分析、メンタルマップの内容分析など、複数の分析方法が採用されている。同時に、ELD (English Language Development) 教室を中心に、校内・塾やSNS という学校外の領域、さらには、日本への帰国後など、多様な時空間を研究の射程とすることで、トランスナショナルに形成されるアイデンティティを多層的に描くことが目指されている。このように多様な研究方法を統合的に用いることで、研究者・研究協力者らが、ともすると暗に前提とする、各社会集団の「成員」「非成員」に関する信条である「真正性(authenticity)」(小林, 2021a, p. 28 ; Bucholtz, 2003) や、それに基づき自己や他者に付与する、本質化・単純化・均質化されたカテゴリーやラベルを、批判的に問いなおす視角が保障されうる。教室内を主要な研究フィールドとしつつも、それだけに限定せず、複数言語環境で成長する当事者の多様な

主観的意味世界・生活世界について、相互行為を基点に理解することを目指し、かれらの名付けと名乗りの弁証法的営為を多角的に描出している点に、本研究の独自性があるといえるだろう。

### 2. 3. 日常的移動を紐解く (1～3章, 5章)

1章から3章および5章では、「今、ここ」という共時的な相互行為に焦点をあて、「日本人」というカテゴリーをめぐる(1章)、また、「日本人コミュニティ」内部を構成する小集団のラベルをめぐる(2章, 3章, 5章)、「日本人」高校生たちの位置取りのありようが描出されている。例えば、1章では、ELD 教室内での相互行為を多角的に解釈するため、日本語を第一言語とする生徒が多数を占めるなど、ELD 教室を構成する多層的な背景文脈を理解したうえで、対話的空間における「日本人」と「それ以外の民族的他者」という境界線が、「日本人」という名乗りおよび他者からの名付けによって流動的に構築され、「日本人コミュニティ」が実体化されるありようが描出されている。

他方で、2章, 3章, 5章では、一見均質的な「日本人コミュニティ」の内側に、生徒たち自身がどのような境界線を引き、小集団を戦略的に形成・管理しているかが、多角的に呈示されている。具体的には、2章では、昼食時に反復的に特定の場所を占拠するというテリトリー化・居場所認識に加え、言語的・身体的実践によって、「悪」「バイリンガル」「メガネ」などの小集団が形成されるありようが描出されている。このような小集団は、学年・ジェンダーや、通塾状況、ELD レベルなど、複数の評価軸によってその境界線が管理されている。同時に、3章で指摘されているように、このような分類に際しては、「同民族で集団化すべきではない」「英語を話すべき」といった、同化主義的な前提やイデオロギーが影響を与えている(p. 208)。ここでは、例えば、「ジャップ」というラベルを資源にしつつ、他者を名付けることで相手を他者化・劣位化したり、同一小集団のメンバーと認識している生徒どうしが「ジャップ」と名乗り・名付けあうことで、「ジャップ」ゆえに校内のメインストリームから周縁化・劣位化されているとして、自らの立場性を正当化したりするなどの営為が描出されている。このような「日本人」という枠組みや小集団の維持・管理および、「日本」の理想化という営為は、校内だけではなく、塾やインターネット上でも展開されている(5章)。

## 2. 4. 個人史的移動を紐解く（4章, 6～7章, 補章）

4章, 6～7章および補章では, 特定の生徒に焦点をあて, かれらのライフストーリーにおける位置取りの変容という, 通時的眼差しに力点が置かれている。例えば, 4章では, パール高校12年生(高校3年生)のタイチによって生成された, メンタルマップとナラティブを分析することで, 高校3年間における, 昼食時に反復的に占拠する場所に関するテリトリー認識, および「FOB (Fresh-Off-the-Boat)」「Not fob」というラベルをめぐる物理的・認識的位置取りの通時的変容について, 中心的に検討されている。これらの通時的変容には, 学校生活・英語への適応に伴う, 校内でのタイチ自身の社会的位置の変化が影響している可能性が, 本書では示唆されている。ただし, ここでの「FOB」というラベルの意味は, 後述するように, 「今, ここ」に生起する相互行為の影響も受け, きわめて流動的である点に注意したい。

また, 6章では, 日本への帰国前後を射程に, 帰国後の進学・就職に至る過程において, 生徒たちがどのように「帰国(子女)」らしさを身体化し, 日本において「帰国(子女)」としての名乗りや位置取りを交渉しているかが, 通時的に描かれている。ここでは, 「帰国生」という位置取りをめぐる, 在米中から日本の教育制度の戦略的な活用を試みる, 高校生たちのトランスナショナルな進路選択や, 周囲の評価を肌感じつつ, 日本にいる「日本人」と「帰国生」である自分との差異化を試みる, 高校生たちの弁証法的営為を感じとることができる (p. 160)。

さらに, 7章では, 「パッシング」という概念を起点に, 「日本人」の父親と「コロンビア人」の母親をもつ, ジュンの移動とアイデンティティをめぐるライフストーリーに焦点があてられている (p. 170)。「パッシング」とは, 人種・性別等が他者からみて不明瞭であるとき, 「自己がどのように見られているかをアクティヴに形成すること」(p. 170)を意味し, 相互行為における位置取り交渉の一側面を明らかにする概念である。例えば, ジュンの場合, パール高校では自らのヒスパニック系のルーツを前景化することを避け, 「日本人」としてパッシングしつづけるなど, 個人史をとおして, 一貫して「日本人」としての自己呈示を試みてきた。しかし, ジュンのこのような位置取り交渉の意図に反し, コロンビアや日本などの多様な社会的空間がはらむ, 人種的ヒエラルキーに関するイデオロギーや, その影響下にある日常的な相互行為における人種化によって, ジュンには多様なラベルが他者によって付されてきたという。

また, 4章に関して上述したように, このような位置取りの流動性・可変性を理解するうえで, ライフストーリーの語りそれ自体も, 特定の場所性・状況性に根ざす相互行為によって成立することを忘れてはならないと, 小林 (2021a) は読者に気づかせる。例えば, 自らを「4



世」「日本人」と名乗り、パール高校の文脈に照らせば「日系米国人」と概して位置づけられる。ジャネットのライフストーリーを主題とする補章では、研究者本人が意図せずとも、「この研究者は「日本人」である」と、研究参加者自身が前提とすることで、かれらの語るライフストーリーの内実や、その語られ方に影響を与える可能性が指摘されている。

このように、「移動する子ども」という経験と記憶とともに生きる当事者は、人種的ヒエラルキーや同化主義的な前提など、場所性に根ざすイデオロギーの影響や、他者からの名付けから免れることが困難であるがゆえに、アイデンティティの位置取りにおいて、「不安定な土壌」(p. 208)に立たざるをえない。そのため、かれらは、ライフストーリーを含めた日常の相互行為のなかで、自らの名乗り・他者からの名付けが相互に影響しあう弁証法的営為に取り組みながら、ライフコースを通じて自らの位置取りを不断に交渉しつづけている。このことを、小林(2021a)は、具体像とともに明らかにしている。

### 3. 「移動する子ども」学からみる本書の研究意義

#### 3. 1. 名付けと名乗りの複合的・弁証法的特徴

本節では、川上(2021)の提起する、名乗りの形成過程の3側面である、「動態性」「政治性」「社会性」を手がかりに、「移動する子ども」学における本書の研究意義について、考察を進めたい。ここで、名乗りの「動態性」とは、「移動する子ども」当事者が埋め込まれる「社会的環境や社会的関係性」に応じて生じる、当事者の名乗る意識の変化・動きのことを指す(p. 86)。このような名乗りの意識の変容の多くは、他者から名付けられた経験や眼差された経験によって生じうる。また、小林(2021a)の議論を鑑みれば、2.3節で言及した「ジャップ」というラベルの使用にみられるように、名付けられた経験を内面化し、他者を宛先にその名付けを連鎖的に再生産することで、自身の位置取りを保障するための資源とする、という経験も伴いうる。つまり、名乗りの意識は、他者から名付けられた結果、動的に生じる社会的構築物であるが、他者からの名付けは、同時に、名乗り・位置取りを保障するための一要素・資源ともなりうるのである。この意味で、名乗りと名付けの関係は、相互に再帰的に影響しあう、複合的で「弁証法」(川上, 2021)的な関係にある、と本稿では考える。

また、このような名乗りと名付けの複合的・弁証法的特徴という視点から、さらに検討を進めたとき、名乗りは「政治性」や「社会性」にも接続する。つまり、名乗りは、日常の相互行

為のなかで、他者からの名付け・眼差しに際して、「常に他者や社会の規範性への「対抗」としての側面がある」(p. 86)と考えられ、この意味で、名乗りは、法的処遇、マジョリティとマイノリティという権力構造や、それに伴うイデオロギーなどの「政治性」の影響を免れえない。同時に、幼少期から移動の軌跡とともにある、複数言語環境で成長する当事者の人生の経験と記憶、生活や日常の相互行為を取り巻く「社会的環境や社会的関係性」という、「社会性」も、名付けと名乗りの弁証法的営為に影響を与えつづける (p. 87)。以下では、このように、名付けと名乗りは複合的・弁証法的関係にあるという理解のもと、これら名乗りの「動態性」「政治性」「社会性」という3側面を基点に、小林 (2021a) の研究意義を検討していく。

### 3. 2. 名乗りの動態性

名乗りの動態性の観点から本書の研究意義を検討するに際しては、補章の分析にとりわけ着目したい。ここでは、「4世」「日本人」と名乗るジャネットのライフストーリーの分析をもとに、「カテゴリーを分析する際の7つの視点」(p. 204)が抽出されている。総じて、名付けと名乗りの弁証法的営為における動態性を、「7つの視点」というかたちでより精緻に整理した点に、本書の研究意義のひとつが認められよう。例えば、通時的眼差しからみたとき、ジャネットの語りからは、一つのカテゴリー(例:「米国人」)から、もう一つのカテゴリー(例:「日本人」)へと名付け・名乗りが変化することや(視点1)、当事者の経験する成長・出来事によって、「カテゴリー自体の意味や意義の変化」(p. 205)が起こりうることを示されている(視点2)。また、個人史内での変容だけでなく、政策やメディアの影響により、同一のラベル(例:「日本人」)が、より広く、政治歴史的に変化することも考えられる(視点6)。

同時に、共時的視点に力点をより置けば、ジャネットが補習校では「ハパ(アジア系の「ハーフ」の意味)」と名付けられていたように、社会的空間の移動によるカテゴリーの変更や(視点3)、トランスナショナルな移動によるカテゴリーの変更を余儀なくされることに加え(視点7)、文脈や目的に応じて、名乗り・名付けのカテゴリーを作為的に変更すること・されることもある(視点4)。さらに、相互行為をより丁寧にみていくと、たとえ同一のラベルが使用されていたとしても、当該文脈によって、その多義性が顕在化することもある(視点5)。このように、「移動する子ども」という経験と記憶を生きる当事者は、時間と空間を軸として、相互行為を基点に、動的に位置取りの交渉を遂行している。このような相互行為に根ざした動態性を理論的に捉える試みが、本書における「translocality」「transvocality」という概念・視角

の提起ともいえよう。

### 3. 3. 名乗りの政治性

名乗りの政治性からみた本書の研究意義は、トランスナショナルに生きる高校生たちの名付けと名乗りの弁証法的営為において、政治性がどのように日常的に取り込まれているか、その具体像が丁寧に描かれている点にある。この点は、金井(2023)でも言及されている論点であるといえる。具体的には、金井(2023)では、政治性の観点から、次の2点が本書の論点として注目されている。第一に「米国への同化を志向するイデオロギー」のアイデンティティ交渉への影響、第二に「帰国子女」をめぐる日本の教育制度が抱える問題や、「日米間の大学進学をめぐる慣習や制度構造の違い」が与えうる、高校生たちのライフコースへの影響である(p. 151)。

とりわけ、第一の点については、生徒たちの日常の相互行為において、「真正性」というかたちで、米国への同化イデオロギーが弁証法的に取り込まれていることから、その影響を理解することができる。例えば、3章では、過度に同化に偏った状態を含意する「アメリカナイズ」や、反対に同化の程度の低さを含意する「Typical Japanese」などのラベルを相互行為の資源としつつ、名付けと名乗りの弁証法的営為を遂行する、生徒たちの「translocality」「transvolatility」が描出されている。ここでは、同化イデオロギーに裏打ちされた「真正性」が、「日本人コミュニティ」内の小集団を管理する際の、生徒たちのひとつの前提となっているように思われる。この点で、同化を志向するイデオロギーは、生徒たちが自らの位置取りを相互行為的に試みる際に、大きな影響を与えているといえる。

第二の点も同様に、例えば、7章で描かれる生徒たちは、「帰国生」としての「真正性」を帰国前後の進学・就職過程で、周囲の眼差しなどから学びとり、日本への帰国という移動の軌跡のなかで、「帰国(子女)」として名乗り・名付けられる弁証法的営為に、アイデンティティの位置取りの軸足を移していると理解できる。このように、国家の制度・権力構造や、それに伴うイデオロギーが、生徒たちのトランスナショナルな日常的生のありように、どのように浸透的に息づいているのかを、かれらの日々の相互行為を基点に、読者に多角的に呈示している点は、政治性の観点からみた本書の独自性といえよう。



### 3. 4. 名乗りの社会性

前節で述べた「真正性」は、同時に、具体的な社会的関係・社会的空間という場における、日々の相互行為によって再生産され、補強されていると考えられる。つまり、「真正性」は、政治性や権力性という、いわば統治権力によって強力に裏打ちされたトップダウンの垂直的なかたちで、個々の相互行為に影響を与えるだけではない。「真正性」は、同時に、政治性や権力性が、当事者に規範として必ずしも明示的に意識化されることを伴わない、水平的・遍在的かつボトムアップ的なかたちで、日常の社会的関係性をとおして、「移動する子ども」という経験と記憶を生きる当事者の間に拡張・浸透していく。このような名付けと名乗りの弁証法的営為における社会性をも包摂し、その具体的相互行為の実践を多層的に描出した点に、本書のもうひとつの研究意義を認めることができよう。

例えば、1章では、ELD 教室という社会的空間において、指導や談話に伴う教員の顕在的・潜在的前提に加え、生徒どうしの(ともすると微細な言動による)日常的相互行為の内実が、どのようにかれら自身の位置取りや境界線化に影響を与えるかが、丁寧に描出されている。ここでは、多様な民族的背景をもつ生徒たちが共在する ELD 教室内で、数人で日本語を使用していたために、韓国語話者の生徒の一人から「日本人」と名指され、「日本人」と「それ以外の民族的他者」という境界線が相互行為的につくられる事例が紹介されている。同時に、「電子書籍を所持」していることをひとつの要件として、自分たちは「日本人」という名乗りによって、境界線を管理する様子も描出されている (p. 58)。また、3章では、例えば「ジャプ」という名付けが、各「日本人コミュニティ」の小集団によって、日常の相互行為のなかで連鎖的に再生産されるありようが描かれている。このように、「日本人コミュニティ」や、それをさらに細分化した小集団の成員に関する「真正性」および集団の実体化が、日々の具体的な相互行為という社会的対話空間によって、ときに生徒たちの「罪悪感」(p.101)を伴いながらも、水平的・遍在的に再生産されるありようを、本書は読者にありありと呈示している。このような社会性に特徴づけられる、名乗り・名付けの弁証法的営為のありようも、多様な移動を経験しつつ成長する複数言語話者だからこそより敏感に経験しうる、相互行為に根ざした「translocality」「transvocality」の発露の一形態として、捉えられるのではないだろうか。

### 3. 5. 総合考察

本稿では、「日常的移動」「個人史的移動」という2軸に基づき本書の要点を整理したうえで

(2章)、名乗りの「動態性」「政治性」「社会性」という3側面を基点に、「移動する子ども」学における、本書の研究意義の考察を試みた(3節)。例えば、本稿2.3節では、「日本人」や「ジャプ」というラベルの使用を事例に、本書が研究対象とする在米「日本人」高校生が、日常の相互行為において、名付けと名乗りをどのように弁証法的に展開しているかを、「日常的移動」という共時的眼差しを中心に確認した。また、2.4節では、本書に登場する、タイチやジャネットらを事例に、いかにかれらのライフストーリーが、「今、ここ」という対話空間において、多層性・多声性や可変性・揺らぎをもちつつ紡がれるかを検討した。

さらに、3.2節では、名乗りの「動態性」が、本書の呈示する「7つの視点」によって、より精緻に分析されうる可能性を検討した。そのうえで、国家制度や社会的構造、これらに伴うイデオロギーが、権力関係に裏打ちされたかたちで垂直的に、生徒たちの相互行為に影響を与える名乗りの政治的ありようや(3.3節)、生徒どうしの日常的相互行為のなかで、これらのイデオロギーの「政治性」・権力性が、必ずしも当事者の明示的な意識化を伴わないかたちで、水平的・遍在的・連鎖的に再生産され、補強・拡張される名乗りの「社会性」のありようを確認した(3.4節)。このように、本書は、トランスナショナルな生活世界を生きる、在米「日本人」高校生たちの日常の相互行為を具体的に紐解くとともに、「移動する子ども」学の提起する枠組みをより精緻化するための示唆を与える研究として位置づけられる、と本稿は考える。

一方、「移動する子ども」学への「transvocality」「translocality」の貢献についての詳細な検討は、今後の研究課題である。これまでのところ、「transvocality」の系譜にあたる多声性に着目した研究は、文化人類学や社会言語学をはじめとした領域で、既に一定の研究蓄積があるものの、地理学的な場所性まで包摂した論考は限定的である(小林, 2021b)。また、「translocality」概念は、トランスナショナリズムの議論を背景に、これまで地理学などで検討されてきたほか(Greiner & Sakdapolrak, 2013)、hip-hop(Alim, 2009)やデジタル・コミュニケーション(Kytölä, 2016)を主題とするディスコース研究などで、近年議論が進められている。小林(2021a)は、「transvocality」「translocality」という理論的基盤に基づき、ライフストーリーの分析において「語りの中の場所性」および「語りの場が埋め込まれている場所性」といった、地理・歴史的な観点にも注目することで、当事者の多層性・多声性や、可変性・揺らぎを読み解いている(小林, 2021a, pp. 189-206; 小林, 2021b, p. 122)。つまり、「transvocality」「translocality」が、「移動する子ども」の個人史的移動を考察するライフストーリー研究における理論的手がかりとなりうることを、具体的な手法とともに示したと考えられる。しかし、こ

のような観点からの分析の有用性については、まだ議論が十分ではないため、さらなる研究が必要であろう。

また、3章で検討した、名乗り・名付けの複合的・弁証法的特徴である「動態性」「政治性」「社会性」と、「transvocality」「translocality」との理論的関係の整理も求められるだろう。本書の示唆から鑑みるに、「政治性」は、地理・歴史的空間たる場所のイデオロギーにより強力に紐づくかたちで、一方、「社会性」は具体的な他者との相互行為という、より遍在的なかたちで、現出すると考えられる。このように、場所のイデオロギーに根ざす「政治性」や、他者の遍在的な眼差しに根ざす「社会性」が、当事者に敏感に内面化され、名乗り・名付けとして、相互行為のなかで「動態性」を伴いつつ再帰的に再生産される弁証法的営為が、「transvocality」「translocality」の内実として、理解できるのではないだろうか。この点を、より精緻に検討することも今後の課題である。

総じて、本書によって提起された理論的・方法論的枠組みや、本書でリアリティとともに描出された複数言語環境で成長する当事者の営み、とりわけ可変的なアイデンティティの位置取りのありようは、「移動する子ども」学がより発展的に展開していくうえで、豊かな示唆を呈示すると本稿は考える。本書から得られた示唆を手がかりとして、今後、本書の「移動する子ども」学への理論的貢献について、より丁寧に検討していきたい。

## 文献

- 金井香里 (2023). 書評『国際移動の教育言語人類学——トランスナショナルな在米「日本人」高校生のアイデンティティ』『異文化間教育』57, 149-151.
- 川上郁雄 (2021). 『「移動する子ども」学』くろしお出版.
- 小林聡子 (2021a). 『国際移動の教育言語人類学——トランスナショナルな在米「日本人」高校生のアイデンティティ』明石書店.
- 小林聡子 (2021b). Transvocality と Translocality —— カテゴリーをめぐる相互行為的分析『異文化間教育』53, 107-124.
- Alim, H. S. (2009). Translocal style communities: Hip-hop youth as cultural theorists of style, language, and globalization. *Pragmatics*, 19(1), 103-127. <https://doi.org/10.1075/prag.19.1.06ali>
- Bakhtin, M. (1981). *The dialogic imagination: Four essays*. University of Texas Press.

- Bakhtin, M. (1984). *Problems of Dostoevsky's poetics*. University of Minnesota Press.
- Bucholtz, M. (2003). Sociolinguistic nostalgia and the authentication of identity. *Journal of Sociolinguistics*, 7(3), 398-416. <https://doi.org/10.1111/1467-9481.00232>
- Clifford, J. (1986). Introduction: Partial truths. In J. Clifford & G. E. Marcus (Eds.), *Writing culture: The poetics and politics of ethnography* (pp. 1-26). University of California Press.
- Greiner, C., & Sakdapolrak, P. (2013). Translocality: Concepts, applications and emerging research perspectives. *Geography Compass*, 7(5), 373-384. <https://doi.org/10.1111/gec3.12048>
- Kytölä, S. (2016). Translocality. In A. Georgakopoulou & T. Spilioti (Eds.), *The Routledge handbook of language and digital communication* (pp. 371-388). Routledge.
- Rodman, M. C. (1992). Empowering place: Multilocality and multivocality. *American Anthropologist*, 94(3), 640-656. <http://www.jstor.org/stable/680566>